

自立 自ら動く

～創・思・鍛～

穂北の子ら

穂積北中学校だより

No. 8

令和元年11月25日

秋も深まり、気もちのよい季節になりました。そして、読書の秋にふさわしいすばらしいニュースが飛び込んできました。井上嬉乃さん(3年生)が夏休みの「読書感想文コンクール」で、県の最優秀賞に選ばれ、岐阜県代表として全国コンクールに進むことになりました。「読書のまち みずほ」にとって大変うれしいことですし、毎日、朝読書を行っている穂積北中学校にとっても励みになるニュースです。井上さんの栄誉を称えるとともに、皆さんにその作品を紹介します。

感想文の題名「伝えたい事」穂積北中学校 三年 井上 嬉乃さん

読んだ本の名前「ある晴れた夏の朝」 出版社 偕成社



穂積北中学校

三年

井上

嬉乃

伝えたい事

今年も八月を迎えた。この時期になると戦争を特集したニュースや記事を多く目にするようになる。日本は世界で唯一原爆の恐ろしさを知る国として、当時の悲惨な状況や今なお続く苦しみを後世に伝える責任を担う。だから、八月は日本人にとって二度と戦争を起こさないと強く心に刻む特別な月だ。私も学校の社会科の授業で戦争の悲惨さを学んだ。その直後に出会ったのがこの本だった。でも、私がイメージしていた戦争の本とは全く違って、最初は戸惑ってしまった。

この本は八人の高校生が原爆否定派と肯定派に分かれて意見を交わす公開討論会の様子を捉えた物語だ。舞台はアメリカ・ニューヨーク。八人とも私と同年代のアメリカ人である。ただし、それぞれがユダヤ系・中国系・アフリカ系・日系など、異なるルーツを持つアメリカ人だ。まず、違和感を覚えたのは討論会のメンバーに私のようないわゆる日本人がいないことだった。原爆を落とした側の意見だけなのは不公平な気がしたのだ。戦争被害について日本人の目線で書かれたものしか私が見てこなかったということだろうか。さらにもっと違和感があったのは、討論会のテーマでもある「原爆投下の是非」という言葉。原爆の痛ましい被害が知れ渡っているも、まだ原爆投下を必要だったと考える人達がいることがショックだった。「どんな理由があったとしても、大勢の人々を苦しめた原爆を日本人として決して許す訳にはいかない。」自分の考えを確かめた後、原爆肯定派に立ち向かうような気持ちで読み始めた。

メンバーの八人は私と同じ戦後生まれだ。つまり、彼らの意見は実体験ではなく、集めた情報に基づいて組み立てたものだ。各自が自分のルーツを反映したような異なる視点から主張を展開していく。まるで、言葉による戦争みたいだと思つた。私は原爆否定派と肯定派の間に挟まれて、意見を聞きたびにそちらの陣地に引きずり込まれていくようだった。いったい私は戦争の何を知っているつもりでいたのだろうか？

原爆肯定派の意見はこうだ。ユダヤ系のナオミはナチスが許せない。だから、ドイツと同盟を結びアジアのヒトラーのように振舞う日本は原爆という罰を受けて当然だと考える。中国系のエミリーは南京虐殺での日本の侵略行為を憎み、リーダーのノーマンは原爆投下がなければ、さらに死者が増えたと予測する。彼らは「原爆は必要悪だ」と主張するのだ。私は最初に読んだとき、彼らの主張を完全に否定することがで

きずにうろたえてしまった。日本も他の国に対して酷いことをしていたのだ。彼らは戦後の日本についても力説する。「戦争放棄と言いつつ、朝鮮戦争やベトナム戦争で武器を売りつけ、日本は経済大国になった。平和国家の仮面をかぶって原爆の被害者ぶらをするのはやめろ。」自分が犯した罪を責められているようで、反論したい気持ちにはしぼんでしまった。でも、ひとつ気づいたことがある。それはメンバーの皆も私も、自分がしたことではないのに、まるで自分のことのように受けとめているということ。被害を受けたことも残酷な行為をしたことも。それは戦後に生まれた者が背負う世界共通の感情なのかもしれない。怒りや後ろめたさを私達は知らないうちに引き継いでいるのだとしたら、どこかで断ち切らなければ心は平行線のままで交わることがないだろう。本の中に出てくる言葉は私の気持ちを形にしてくれた。「過去のことを反省すべきだが、引きずったりとらわれたりしちやだめだ。」と。

本を読み終えた私は、自分の知らなかった出来事や考え方に出会い、もつと知りたいと思うようになった。そして、原爆投下はやはりすべきではなかったという思いを強くした。原爆が政治的な思惑や実証実験の目的で落とされたことは人として許されることではない。原爆否定派は投下の理由を白人によるアジア人への人種差別と結論づけた。そして、自らをおとしめる「差別する心」から解放されよと訴える。また、差別を受けた側に対しては「許す心」を持って呼びかける。私が誰かに嫌なことをされたら、恨んだり嫌いになったりしないでいられるか自信がない。これは自分の中の戦いだ。差別する心は自分が優位に立ちたいことの裏返しだと思う。相手と同じライオンに立つ、つまり相手の立場を想像し、相手を尊重することが大事なのだ。許す心は相手の心を開く鍵だと思う。お互いが歩み寄るチャンネルを作るものだ。頭では理解できるが実際はとても難しい。でも、これから生きる私達がやらなくてはいけないことだ。討論会の最後の言葉。

「われわれ人類は共通の敵、無知や憎悪や偏見と戦わねばならない」
誰もが望む平和の為に、皆に伝えたい言葉だ。



※【お知らせ】11月29日（金）穂積北中学校合唱祭の「合唱順」が決まりました。

1年生 ①4組 ②1組 ③2組 ④3組

2年生 ①2組 ②1組 ③4組 ④3組

3年生 ①3組 ②1組 ③2組 ④4組

13:00～瑞穂市総合センター サンシャインホールにて

◎保護者の席は2Fです。駐車場が少ないです。徒歩や自転車でのご来場にご協力ください。

